

# 禪と共に歩んだ先人

やまおか てっしゅう

## 山岡鉄舟 IV

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思います。

### 結婚

父母の急逝にともない、飛騨高山より江戸へ戻った鉄舟は、剣の師匠である井上清虎のはからいにより、千葉周作の構える「玄武館」へ入り剣術修行にはげましました。十九歳頃の事と思われませんが、武州柴村（現・川口市）長徳寺の願翁和尚に参禅し、「本来無一物」という公案（臨濟禪における師から弟子に出題され

るもの）を与えられ、生来まつすぐな性の鉄舟は昼は竹刀を振り、夜は座禅三味という生活を送る事になりました。剣術の腕前はメキメキと上がった様ですが、公案には大変苦勞をした様で霧の中で山を望むようだったと述懐しています。それでも倦むこと無く日々鍛錬をかかさなかつたそうです。

二十歳になって年初、槍の名手として名高い山岡静山の道場を見学に行った鉄舟は、その槍の達人ぶりもさる事なれどその静山の人となりにも感服し、早速入門し忍心流槍術にもはげむ事となりました。静山はその時二十七歳、まだまだ若い槍術家ですが、その腕前はこの国で一、二と云われる程でした。またその人望の厚さで多くの人に慕われ、多くの門弟に囲まれていました。鉄舟もその薫陶を受けたのですが、半年もたたぬうちに静山が急死してしまつたのです。鉄舟の悲嘆は大きく、毎夜墓前に行つて夜をすごしたという事です。

山岡家では跡継ぎが問題となつていました。静山に弟はいたのですが、別の家に養子に出ていて継げず、妹の英子が婿をとるといふ事になりましたが、そこで目をつけられたのが鉄舟でした。しかし小野家と山岡家では身分格式に大きな差があり、そんな貧しい家に来てくれとはなかなかいえない状況でしたが、先述の静山の弟、高橋泥舟（山岡鉄舟、勝海舟と並び「幕末の三舟」と称せられる）は親しかつた事もあり、話を持ちかけてみると、「心から尊敬する静山先生」の家に望まれるならと婿養子入りを快諾したのでした。鉄舟の無欲さ、ケレン味の無さに驚かされます。勝海舟の云う鉄舟評として「馬鹿正直」というのがありますが正にその名にふさわしいエピソードでしょう。

とはいえ、これから山岡家の赤貧生活が始まります。鉄舟は大いに苦勞する事となるのでした。

以下次号（一峰 義紹）